



談 話 室

ぶんせき誌の記事を埋没させないために

2022年3月より、ぶんせき誌は個人会員への冊子体配布がなくなった。現在のところは実費での冊子体配布依頼が可能とはいえ、ぶんせき誌を毎月欠かさず読んでいた方、研究室で閲覧していた方にとっては不便になったかもしれないし、一方では積みあがる冊子体を処分する必要がなくなって環境に優しいと感じておられる方もいるかもしれない。ただ、いずれの場合にしても、やはり冊子体がなくなることでぶんせき誌の閲覧頻度自体が下がった方は多いように思うのだけれども、皆さまどう感じておられるだろうか？

とはいえ、今回の電子化というのは学会の経費削減の側面からは必要なことだったのかもしれないし、オンライン版は従来通り閲覧することができる。オンライン化に伴ってぶんせき誌のページが新しくなり、技術紹介といった新しいコーナーもオンライン化と並行して準備されたりしているわけなので、今回のオンライン化がはたして成功であるかについては今後数年かけて検証していただければと思うところである。

それはともあれ、ぶんせき誌には解説や入門講座、ミニファイルなど、編集委員が分析化学会内外の各分野の専門家に依頼、執筆された信頼できる記事が多数あり、初心者向けから研究者向けまで、分析化学に関係する様々なレベルの有益な情報が日々蓄積されている。もちろんぶんせき誌は分析化学会員向けの会誌であるわけであるが、その内容は会員にはとどまらず、科学・化学に携わる学生・研究者にとって有益なものも多い。

たとえば2011年、東日本大震災の福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質汚染に際しては、日々発表される放射線測定結果に記載されている検出限界や定量下限について学ぶため、ぶんせき誌、入門講座の無料公開記事（ぶんせき誌2010年5月号、216-221）がtwitter等で頻繁に参照されていた。ほかにも様々な測定手法の原理と実際について扱った2017年の入門講座「分析機器の正しい使い方」など、講義で取り上げるに便利な記事も多い。

しかしながら、こうした多くの有益な記事の多くは、記事の検索がほとんどされることがない状況に置かれているように見受けられる。分析化学会のぶんせき誌サイトでは目次が公開されているのみであるし、CiNiiのようなオンラインデータベースでもタイトルと著者名が公開されているのみである。

出版直後を除き、こうした記事に到達する経路は多くの場合インターネット検索か論文等からの引用であろうと考えられるが、タイトルと著者のみから記事の内容を判断して図書館で閲

覧したり、分析化学会に入会してアーカイブを読んだりといったことは通常行われまいであろう。記事が閲覧されるための動機としては、やはり記事の内容がある程度わかることが必要不可欠である。

ゆえに筆者はぶんせき誌のWebの目次ページにて、タイトル・著者だけでなくすべての記事の最初の1ページ程度を無料公開することを提案したい。抄録を公開するという手もあるが、ぶんせき誌にはすべての記事に抄録があるわけでもないし、一般に抄録のみでは記事内容が分からないことも多く、続きが気になるということもない。一方、過去すべての記事の一部公開であれば、インターネット検索からも掛かりやすくなるし、その結果新たな読者の開拓も見込める。さらに作業は一度で済み、Webサイトやシステムを大きく改変する必要もない（もちろん定期的に広告を変える等の展開もありうるが）。書籍化の可能性や会員特典としての機能についても損なわれにくい。すなわち分析化学分野の裾野を広げつつ、記事の埋没を防ぎ利用率を高めることが比較的容易にできることになる。

日本人にとって日本語で学べる機会は重要である。ぶんせき誌の各種記事は単に教育的であるだけでなく、その参考文献すらも関連情報へのポイントとして重要である。他の学会が行っているように、ある程度以上古い記事は全文無償公開してDOIを付与するといったことを今後考慮されてもよいだろう。今回の電子化を機に、過去から現在に至るまでの先人の知の蓄積を埋没させないよう、更なる飛躍が求められるのではないだろうか？

〔千葉大学大学院工学研究院 野本知理〕

インフォメーション

理事会だより（2022年度第3回）

昨年6月の理事就任以来、支部担当理事としてこれまで何度か理事会に出席している。とはいえ、自らの感覚としてはここ1年程、第82回分析化学討論会の準備が負荷の大半を占めており、理事会の全体像について何らかの理解できたとはおおよそ言い難い。各位のご尽力により今般討論会もようやく一区切りが付き、6月の理事会には軽やかな心持ちで臨むことができた。これを機会に改めて私自身の不理解を補うべく、理事会の概要を基礎から振り返りたい。そんなこと当然、との読者にはご容赦を願う。

理事会は現在22名の理事と2名の監事から構成され、年6回の開催が基本となる。学会の基本法ともいえるべき「定款」（学会HPに掲載）によりその存在が定義され、「学会の業務執行の決定」をはじめとするいくつかの権限が規定されている。さらに会長、副会長を中心とする数名の理事が「業務執行理事」としてその中核（執行部）をなすものと理解している。

理事会には六つの協議会（本部活動〔理事会、本部支部連絡等〕、組織運営〔企画戦略、財務等〕、学術振興〔学会賞等表彰、学会誌等〕、学術会合〔年会・討論会、研究懇談会等〕、社会活動〔産学官連携、標準物質、技能試験、分析士等〕、会員・広報〔会員管理、広報等〕）が設定され、会長、筆頭副会長、副会長4名がそれぞれの協議会における業務を掌理している。この各協議会にぶら下がる形で各委員会等さまざまな会議体が位置付けられている。なお、毎回の理事会ではそれらの協議会の業務ごとに状況が報告されることとなっている。さて、直近

の定時の理事会は6月29日に開催された。特筆すべき議題として以下の2点を取り上げたい。

○規程類の体系化と全般的な改定

一般に団体が公平、公正に運営されるためには、規程類の整備とそれに基づいた運用が不可欠である。これは一貫性のない運営や、恣意的な判断を避けるため、特に公益社団法人のような団体ではいわゆる「ルールブック」としての整備と運用、そして周知が期待される。ところがこれまで学会の現状として、整備された規程類が目につくことなく知られていなかったり、既に現状にそぐわないものであったりと、甚だ心もとない状況にあったようである。今般、「規程類マップ」が作成されそれらの存在が整理・体系化されるとともに、現状に沿うべく多くの規程類が改定された。膨大な量を対象としつつ繊細な作業を必要とするこれらの取組みには心より敬服するばかりである。今後、意欲のある多くの皆さまの運営参画の機会につなげることで、会務の向上となる、いわば「魂を込める」活動へと展開するものと思う。かつて某法人の役員より『規程（ルール）は個々の人間を縛るものではなく、円滑に活動するためのユニフォームである』、との言葉を伺ったことがある。学会活性化の起点となることを期待したい。

なお、この中で重要な改定点として「会員の各委員会等での活動における謝金がなしと明記されたこと」、「再任の回数に一定の制限を設けられたこと」がある。前者は学会の厳しい財政状況が影響しているかとも思うが、むしろ公益社団法人としての公益性を斟酌したものを受け止められる。会員による活動に伴う経費以外の金銭の受領については様々な考えがあるものと思うが、「公益性の高い法人」においては会員の労に對し必ずしも金銭ではなく、会として授与する栄典の類（既存のものに

限らず）により報いることも一つの考えでないか、また後者についてはこれにより活動する会員の流動性が高められることとなる。

○「シニア会員」（仮称）の提案

現在、当会会員の年齢構成は特に定年近傍に多く分布している。ところが定年等により職を離れると同時に退会される方が少なからずおられるとのことで、この方々の会員としての継続が課題となっていた。このため、ある年齢以上の会員を対象に、一定額を納入することにより生涯にわたり会員資格を得ることができる制度の設けることとなった。詳細は今年度中にも案内があるものと思うが、日本化学会におけるいわゆる終身会員と同様の制度と考えられる。「コミュニティに属する」ことはむしろ定年後、職場を通じた社会との接点が弱くなる時の方が人生の重要なテーマであるように思う。制度の早期決定と該当する多くの会員各位の活用を期待したい。

上記の他、これまで本部で行われていたセミナーの関東支部への移管が着実に進捗していること、学会賞等受賞者の承認、第82回分析化学討論会の開催報告（速報）なども議題となった。なお、学会の財政状況が厳しいことから、「現預金残高状況」などについては毎回、また「会員現況（入退会、会員数等）」も定期的な報告がある。

以上、理事会の構成と前回議題の概略についてまとめた。学会運営の基礎に関する理解と現状認識の促進とともに、サイレントマジョリティともいふべき多くの会員の皆さまにとり意見具申の手がかりとなればと思う。小職の不理解等による誤認などあれば随時ご指摘いただければ幸いである。

〔関東支部担当理事（量子科学技術研究開発機構） 山本博之〕

執筆者のプロフィール

（とびら）

田中秀治 (Hideji TANAKA)

徳島大学大学院医歯薬学部薬学系分析科学分野（〒770-8505 徳島市庄町1-78-1）、京都大学大学院薬学研究科博士後期課程中退。薬学博士、薬剤師。《現在の研究テーマ》流量変化を利用した新規フロー分析法の開発。《主な著書》“基礎分析化学”（廣川書店）。《趣味》家庭菜園、クサガメ飼育。
E-mail : h.tanaka@tokushima-u.ac.jp

（ミニファイル）

田中 茂 (Shigeru TANAKA)

十文字学園女子大学名誉教授・化学防護手袋研究会会長。早稲田大学大学院理工学研究科修了。保健学博士。《現在の研究テーマ》化学物質ばく露に関する調査研究、労働衛生保護具の活用。《主な著書》“知っておきたい保

護具のはなし”。（中央労働災害防止協会）、（2015）。

E-mail : stanaka@jumonji-u.ac.jp

（トビックス）

小宮麻希 (Maki KOMIYAMA)

東北大学電気通信研究所平野研究室（〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1）、東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程後期3年の課程。博士（理学）。《現在の研究テーマ》人工細胞膜を用いたイオンチャンネル解析系の構築。

青木 譲 (Jo AOKI)

福島大学大学院、日本原子力研究開発機構（〒960-1296 福島県福島市金谷川1）、福島大学大学院博士前期課程（博士後期課程在学中）。《現在の研究テーマ》質量分析計を利用した放射性核種の定量。《趣味》ドライブ。
E-mail : s2171001@ipc.fukushima-u.ac.jp

（リレーエッセイ）

木下充弘 (Mitsuhiro KINOSHITA)

近畿大学薬学部（〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1）、近畿大学大学院薬学研究科。博士（薬学）、薬剤師免許。《現在の研究テーマ》マイクロチップ電気泳動による高スループット糖鎖解析、細胞グライコミクス・メタボロミクス連関の解析。《趣味》海釣り、水泳。

E-mail : m.kino@phar.kindai.ac.jp

（ロータリー・談話室）

野本知理 (Tomonori NOMOTO)

千葉大学大学院工学研究院共生応用化学コース（〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33）、東京大学大学院理学系研究科化学専攻。博士（理学）。《現在の研究テーマ》光を使った非接触型界面張力測定手法の開発と応用。《趣味》カメラ、プラネタリウム。

E-mail : nomoto@faculty.chiba-u.jp

訂 正

本誌2022年第9号のお知らせ（p. M1）において、受賞者の所属に誤りがありましたので、下記のとおり訂正いたします。

（誤）有馬 彰秀 君（名古屋大学大学院工学研究科・特任講師）

（正）有馬 彰秀 君（名古屋大学未来社会創造機構・特任講師）